



〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島司教区
電話099 (226) 5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円

道標



司教を講師に「寄り添う」を学ぶ 今年のカトリック北薩大会

北薩地区の教会をキリストの愛でつなぎ、地域力を高めようという「カトリック北薩大会」が六月二十一日(日)午後、鹿児島純心女子大学の川内キャンパスを会場に開催された。今年の大会のテーマは「寄り添う」で、郡山司教による講話と分かち合いがあり、堅信式も組み込まれたミサで締めくくられた。

北薩地区にあるのは阿久根、出水、川内、大口、入来、五つの小教区。主にレデンプロール会の司祭たちが担当してきたこの地区では、三十数年前から地域における信者たちの力を結集しようとする一歩、研修と親睦の場としてこの「カトリック北薩大会」を開催し続けている。

中心となって開催。テーマとして掲げた「寄り添う」は、今年の「年頭の思い」(教区報一月号)で郡山司教が訴えた教区目標「寄り添う」に決められ、その意義を再確認しようとする講師を司教に依頼した。

郡山司教が講話した。水辺に沿って歩くイメージを「寄り添う」から連想する。この司教は、寄り添うべき人の第一に「自分自身」をあげ、「一番厄介な存在である自分自身と出会い、ありのままを理解し受け入れるようにしよう。自分を否定しては、いいものとして人間を創造された神に失礼になる」と訴えた。



①「寄り添う」について熱心に分かち合う出席者たち
②司教を囲んで記念撮影の受堅者

その上で、次に寄り添うべき人とは誰かを考えること、その寄り添い方を自分の体験を交えて解説し、最後に「神に寄り添う、寄り添ってもらおう」ことを忘れ

てはならないと述べ、「神と共に歩むためには傾聴力、すなわち祈ることが大切だ」と結んだ。講話を聞いた出席者たちは、その後、寄り添うについて分かち合いをし、グループごとに分かち合いで気づいた思いを色紙に書き込む作業を行った。

教区フェスタなど秋の教区行事を検討 パッションの会も認可

六月の司祭評議会

六月二十九日(月)、教区本部で司祭評議会が開かれた。主な議題は①「教区財政正常化献金」廃止後の教区会計、②ベネディクト・パッションの司祭叙階式と祝賀会、③教区フェスタについて三つ。

時からカテドラルで。叙階式後、カテドラル一階ホール、駐車場、教区本部で祝賀会を実施する。

①正常化献金実施時に同献金として九六〇万円が入っていた。廃止後は維持費が増え教区費増となった小教区もあるものの、全体としては教区会計納入分が約七〇〇万円減少しているという現状が報告された。

③教区フェスタは九月十三日(日)、午後一時からカテドラルで開催。教区フェスタは、家族ぐるみで福音宣教を考えるとという趣旨でこれまで四回開かれてきた。今年も、教皇の「福音の喜び」をもとに、頭島光神父の講演とそれを受けて

シスターモニカの故郷 ドイツから献金

六月二十四日(水)、ドイツのレーゲンスブルグ教区から鹿児島司教区に約七五〇〇ユーロ(百二万三千六百五十七円)が献金として送られてきた。これは、レデンプロール宣教修道女のシスター・モニカが故郷で鹿児島司教区の厳しい財政事情を話したところ、その支援のために同教区の信者たちからのミサ依頼と

して送金されたもの。郡山司教は同教区のミヒヤエル・フックス司教総代理に対して、「依頼された意向に沿ってミサをささげるとともに青少年のために使わせていただく」との感謝の手紙を送った。

司教の霊名を祝う 六月の定例司祭集会

六月三十日(火)、教区本部で、定例司祭集会(コンベンツス)が開かれた。



主な議題は、前日(二十九日)の司祭評議会での審議されたことの報告、確認。会議後は前日が聖ペトロ・聖パウロ使徒の祭日だったため、司教の霊名のお祝いとしてミサをささげた。(報告・末吉卓也)

お知らせ
九月開催予定の司祭評議会、定例司祭集会は順に、十月五日(月)、十月六日(火)に変更されました。本部事務局

鹿児島教区主催 第24回夏期集中講座

テーマ:カトリックの信仰 (最終回)
第4章「秘跡」
第5章「開かれた未来」(歴史の意味、死の意味)

テキスト(1)「カトリックの信仰」(鹿児島教区司祭評議会編、あかし書房刊) ※ザビエル書院で購入可 定価600円(税別)
(2)新約聖書

日時:8月17日(月)と19日(水)~22日(土) ※18日火曜休み 昼の部10時~12時/夜の部19時~21時

場所:ザビエル教会1Fホール
講師:竹山 昭神父(ザビエル教会主任司祭)
受講料:1人500円(受講回数に関係なく) ※支払いは当日
申込先:鹿児島司教区本部「夏期集中講座」係

※できれば小教区ごとにまとめて本部へ氏名、電話番号を連絡のこと

TEL 099 (226) 5100
FAX 099 (225) 0440

司祭を目指しローマ留学

教区大神学生 霧島 彬さん

鹿兒島教区の皆様、こんにちは。教区神学生の霧島彬(きりしまあきら)です。始良教会の出身で、二〇一三〜一四年度からローマの聖十字架大学に通いつつ、国際神学院「セデス・サピエンチエ」で司祭職への養成を受けており、神学生としては三年目を迎えました。この度夏期休暇として



霧島神学生 勉強を続けるローマで

二年ぶりに帰国しましたので、紙面をお借りして私自身のこととローマでの神学生生活の様子を簡単に紹介したいと思います。

私は一九八七年生まれの二十七歳です。高校卒業まで始良で過ごし、その後は京都大学で西洋中世哲学史を専攻し、修士課程まで修了しました。

司祭召命のことを考えるきっかけとなったのは六年間の学生時代に通った大学近くの北白川教会(聖ヴィアトール修道会)での司祭、修道者、信徒の方々の交わり、また下宿近くのオプス・デイ属人区の学生センターでの黙想会や勉強会、青年たちとの様々な活動でした。特に修士課程の二年間、センターの司祭との霊的指導を通して自

分の召命を深め、大学院修了後、鹿兒島に戻って郡山司教様に「神学生として受け入れていただきたい」とお願いしたところ、受け入れを了承してくださいました。お願ひなく、司教様の寛大な計らいにより、オプス・デイの運営する聖十字架大学と「セデス・サピエンチエ」での養成の機会を与えてくださいました。

ローマのナヴォーナ広場のすぐ近くにある聖十字架大学は教皇庁立大学の一つで、オプス・デイ属人区が運営・指導する大学です。神学、哲学、教会法学、コミュニティ・サービスの四学部で約千二百名の学生が学んでいます(二〇一四〜一五年度現在)。そして私の住んでいる国際神学院「セデス・サピエンチエ」(ラテン語で「上智の座」の意)は聖十字架大学付属の教区神学生のための神学校で、養成はオプス・デイの司祭たちに委託されています。昨年度の時点で、二十七日から八十七人の神学生が在籍しており、非常に国際的な雰囲気のある神学校です。またローマ典礼のみならずインドのシロ・マラバール典礼、レバノンのマロン

とは分かっていますが、まだまだ多くの方が足を運んでくださらない状態です。鹿兒島教区が全国の教会を代表して開催しているこの記念祭には、全小教区の信徒一人ひとりが何らかの形で参加しなければならぬと思います。「カトリック平和旬間」の最終日でもある八月十五日ですが、今年には戦後七十年という節目にあたり、平和について皆さんと考えるようにするために以下のような構成にし

派典礼の神学生もおり、まさに教会の普遍性が表れています。

さて私は哲学部の二年生に編入学しましたので、哲学過程は一年で終了して、昨年度は神学部に進学し、今秋十月から神学部二年が始まる予定です。

ローマでの生活ももう二年が経ちイタリア語にもだいぶ慣れ、大学での勉強のみならず、たくさんの人との出会いや交流の中で、そして仲間である神学生たち

堅信を受けた喜び

ザビエル教会で受堅した中学生

中学一年 西久保祐希

ぼくは堅信を受けて、キリスト教の奥深さを知りました。堅信は信者として大人になる秘跡と教えていただきました。

ぼくは中学になり、部活に入っていますが、日曜日にも練習が入り、調整できず、日曜日のミサをさぼることが多かったです。でもシスターとの勉強で「人生で最も大切なことは、宗教であること」を学びました。よく考えてみると「そうだな

との交友の中で多くのことを学ぶ毎日を通じています。特に神学校では、同じ一つの召命にこたえようとする者同士が互いに助け合えることができるよう、養成者、霊的指導者、神学生の間に緊密かつ親しい関係を養うことを重視しています。この意味で、毎日昼食後に四つのグループに分かれて行う歓談とロザリオの祈りのひとときは、「セデス」の家庭的な雰囲気をよく表していると思います。(続く)

なつたらいいと思います。最後にご指導いただいた山頭シスターや竹山神父様、教会学校の方に感謝します。ありがとうございます。

中学一年 豊丸あらん
ぼくは長いこと、一年以上も教会に行ってなかったのに、リーダーやシスターからメールやハガキが届き、ミサと堅信の勉強に行った。でもやはり二回目からまた欠席した。

するとシスターから「今、堅信を受けなかつたら、あなたの生涯がだめになる。大切なことだから来なさい」と手紙がきた。ハッと目がさめたように堅信の大切なことに気づき、ゆるしの秘跡を受ける朝は一番に父に送ってもらい、教会に行った。ひさしぶりに「ゆるしの秘跡」を受け、心が軽く、さわやかになった。シスターが喜んでくれた。信者の皆さん、ぼくたちのためお祈りやお祝いの茶話会をしてくれて、ありが

あ」と思います。今までは、ただ何となく理解していた部分がありましたが、シスターの話を聞いて、より深くキリストを感じる事ができたと思います。これからも教会に通って、わからないことが少しずつでも理解できるように

本の紹介



★『平和をつなぐ』松浦悟郎著、ドン・ボスコ社 五五〇円(税別)

カトリックの平和活動の指導者として長年尽力されている名古屋司教の新著。キリスト者として自分の頭で平和を考え、行動する勇氣と希望を与えてくれる。平和月間の読書に最適。

★『平和をつなぐ』松浦悟郎著、ドン・ボスコ社 五五〇円(税別)
カトリック中央協議会編、カトリック中央協議会 六〇〇円(税別)

とうございました。中学一年 野元あかり
今日、郡山司教様から堅信の秘跡を受けました。中一同級生三人、三回勉強しましたが大切なことを習いました。

心に残っていることは「間違った宗教にだまされるな」という時間でした。ごちゃごちゃ言い寄ってきて言い返しができないとき、話しかけてくる人の宗教に七つの秘跡があるか、ないか確かめる。「秘跡はカトリックのいのちだから」これに反していたら、まず用心しなさい。そして神父様やリーダーたちにたずねる、ということでした。カトリックの特徴をよく勉強しておくことが大切、と分かりました。

これからは自発的にミサに行き、ゆるしの秘跡を受け、信仰を育てていくように努力します。送り迎えなど協力してくれた家族、教えてくれたリーダーたち、お祈りしてくれた信者の皆さん、ありがとうございます。

現代日本の典礼学の七人の専門家が信仰生活における時間、季節、信心の意義などを、中学生にも分かる言葉で解説。典礼暦年の理解が深まり、典礼を積極的に行うためにはよく準備することが大切であることを痛感する。

私たちが信者は単純に神さまを信じたいと思うのに、社会の現実はいかに複雑。世界は神さまよりも富を重んじ、互いを尊敬し感謝する心さえ失われたかのよう。どうしたらいいのだろうか。やはり神さまに毎日毎日相談しながら歩いて行くしかない。(教区本部・末吉卓也)

足を運ぼう8月15日の記念祭

ザビエル上陸記念祭実行委員 徳永善博

聖フランシスコ・ザビエルは、私たちのこの地・鹿兒島に聖母被昇天に合わせ、現在の祇園之洲に上陸し、日本における布教活動を二年間にわたり続けました。上陸したのは一五四九年八月十五日のことです。今年には来鹿(渡来) 四百六十六年になります。

聖ザビエルの布教開始を記念し続けている「ザビエル上陸記念祭」ですが、昨年から信徒一人ひとりからの募金によって運営されています。これはこの上陸記念祭の意義を一人でも多くの方に担って欲しいという思いからですが、残念なことには大切な記念祭であるこ

とに分かっていても、まだまだ多くの方が足を運んでくださらない状態です。鹿兒島教区が全国の教会を代表して開催しているこの記念祭には、全小教区の信徒一人ひとりが何らかの形で参加しなければならぬと思います。「カトリック平和旬間」の最終日でもある八月十五日ですが、今年には戦後七十年という節目にあたり、平和について皆さんと考えるようにするために以下のような構成にし

てあります。どうぞ会場のザビエル教会に足をお運びください。

第一部 聖体礼拝(7時30分〜10時30分)

第二部 郡山司教講話「ザビエルと平和」(11時)

第三部 平和の鐘を鳴らせ(11時25分) 講話・田中弘允鹿兒島ユネスコ協会最高顧問

※正午に合わせて鐘を鳴らします。

第四部 聖母被昇天ミサ

第五部 交流会

祈りの人への願いを込めて

ザビエル教会で九人が堅信の恵み

七月五日(日)ザビエル教会では堅信式があり、九人が堅信の恵みに浴した。



司教から油を塗られる受堅者

堅信の儀を前に説教した郡山司教は、この日の第二朗読「使徒パウロのコリントの教会への手紙」の一節に触れ、「キリストを信じる者はいつもキリストと一緒に働いてくださっていることに気づけば、『わたしは弱い時にこそ強い』と確信することができ

る。これは洗礼を受けた者にしか理解できない信仰の基礎。だから今日の堅信の秘跡によって、信者として生きる決意表明を

し、キリストと共に働いていこう。そしてその思いを持ち続けるためにも主日のミサを大切にしよう」とメッセージを送った。

れ、大人の信者としての一歩を踏み出した。ミサの終わりに教会から「祈りの人になって欲しい」との願いから「祈りの友」(カルメル会編)が受堅者一人ひとりに贈られた。また司教も「自分のためにだけでなく世界のために祈って欲しい」とゴアで購入したロザリをそれぞれにプレゼントした。

活動に理解と協力を

障害者と歩むパッションの会

障害者と共に歩むパッションの会は、毎月、最後の日曜日の十五時から鴨池教会で活動しています。設立

から今年で十二年になりました。十二年前の全国大会「カトリック障がい者東京大会」を皮切りに、三年毎に新潟大会、名古屋大会と参加し、今年の八月には札幌大会に参加します。

12月8日から「いつくしみの特別聖年」

司教執務室便り

八月と言えば聖母被昇天、ザビエル様鹿兒島上陸お盆、そして終戦記念日。今年には戦後七十年の節目に当たることから政治的にも話題が多い。

日本が米英に宣戦布告したのも、マリア様が無原罪の御宿りであることが教義として公認されたのも同じ十二月八日。

増幅させていることに気付こうとしない現政権の姿勢は、真珠湾の暴挙と重なる。そんなじくじたる思いでいるところにフランシスコ教皇の「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」が届いた。

鹿兒島教区としては、今年も、鹿兒島ユネスコとの共催で十五日の十二時に「平和の鐘を鳴らす」ことになっていく。ザビエル上陸記念祭実行委員会の議事録によると、今年も、それまでに、三時間にわたる聖体礼拝や講演会も予定されている。特別な感じがする。

日本が身の程知らぬ暴挙に出て日本はもろろんアジアの人々を取り返しつけない阿鼻叫喚の世界に突き落とされたのも、原爆という鉄槌を下されてやっと目が覚めたのもマリア様の記念日というのは、やはり特別な感じがするのだ。ここに、平和憲法を変えようとする

「いつくしみの特別聖年」のいわばキャンペーン書。聖年のモットーが「御父のようになつていつくしみ深く」であること述べられ、カテドラルやその他の主な教会で「いつくしみの扉」を設置するように呼びかけておられる。鹿兒島教区でもぜひ設置したいと思う。そして、戦後七十周年を特別の年にしたい。

特別な感じと言え、八月十五日が教会とかかわりの深い日であるのと同じように、真珠湾攻撃によって

諸国の人々にかつての悪夢を蘇らせ、不安を



何よりも各自の心の中で平和の鐘が鳴るとき神のいつくしみも平和もやって来る。

訃報

萩原百合修道女

萩原義幸神父(レデンプトル会・出水教会主任)の令姉・ヨセフィナ萩原百合さんが六月二十四日(水)十五時頃、入院先の長崎聖フランシスコ病院で帰天した。四十歳だった。百合さんの通夜と葬儀は、所属するお告げのマリア修道会の本部修道院でしめやかに執り行われた。

鹿屋教会で堅信式

六月二十八日(日)、鹿屋教会(ドミンゴ宋診旭神父)では堅信式があり、二人がその恵みに浴した。

ブイジュ祭

七月十二日(日)瀬留小教区では、ブイジュ神父の遺徳を偲ぶ「ブイジュ祭」があり、郡山司教をはじめ百人ほどの信者が集った。

短信

+KABAYAN SEKSIYON+
Ang Natatanging Bokasyon at Misyong ng Laiko

Kaisa ng lahat ng mga kabilang sa Simbahan na bumubuo sa Bayan ng Diyos, ang laiko ay nagtataglay ng katulad na dignidad sa bawat binyagang Kristiyano at pantay na pagtawag tungo sa pagiging banal. Bawat isang kabilang sa Simbahan ay mayroong misyon ng apostol maging sa Simbahan at sa mundo. Ngunit kinikilala ng Vaticano II na hindi lahat ng kasapi sa Simbahan ay nagtataglay ng magkakatulad na mga biyaya o particular na misyon. Mayroon isang magandang pagkakaiba-iba sa Katawan ni Kristo!

Makikilala at matutukoy ang laiko sa "kanilang secular na karakter...Ang laiko, sa pamamagitan ng kanilang bokasyon, ay naghahanap sa Kaharian ng Diyos sa kanilang pakikisangkot sa mga pansamantalang gawain at sa pagsasabay sa mga ito ayon sa plano ng Diyos" (LG 31).

Tunay ngang "ang laiko ay tinatawag sa natatanging paraan dahil at gawing buhay ang Simbahan sa mga lugar at mga pagkakataon na tanging sa pamamagitan lamang nila ito maaaring maging asin ng sanlibutan. Kaya't bawat laiko, sa bisa ng mga biyayang kaloob sa kanya, ay sabay na isang saksi at isang buhay na kasangkapan ng misyon ng Simbahan" (LG 33). Ang pagpapanibago ng mundo ang misyon ng laiko!

Bawat isa sa atin ay binigyan ng Diyos ng iba't ibang kakayahan na maging saksi ng ating pananampalataya sa ibang mga tao. Sundin natin ang tawag sa atin ng Diyos.

Katesismo sa "Taon ng Laiko (Fr. Dino Orolfo)

会と催し (8月)

- 1日(土) アルフォンソ祭
- 2日(日) ユーキャット学習会・種子島年間第十八主日
- 3日(月) 子ども大会・マリア山荘・5日まで
- 6日(木) ルーシン神父命日(一九九四年)主の変容
- 7日(金) 日本カトリック平和旬間始まる・15日小平卓保神父命日(二〇〇五年)
- 8日(土) 宣教学校・ザビエル教会・13時30分
- 9日(日) 年間第十九主日
- 10日(月) 聖ラウレンチオ助祭殉教者
- 15日(土) 聖母の被昇天
- 16日(日) ザビエル祭・カテドラル・7時30分
- 17日(月) 年間第十六主日
- 18日(火) 教区巡礼委員会・教区本部・19時
- 19日(水) 夏期集中講座・ザビエル教会ホール・10時と19時・22日まで
- 23日(日) 年間第二十一主日
- 24日(月) オリブの会・教区本部・14時
- 28日(金) 聖バルトロマイ使徒
- 29日(土) オーバン神父命日(一九八八年)
- 30日(日) ME・教区本部・13時
- ▼ペルリーニ神父命日(二〇〇八年)

祈りの意向

- 【フベナ】ザビエル上陸記念祭(3日~12日)
- 【祈禱の使徒会】世界共通・ボランティア
- 宣 教・社会の隅に追いやられた人々
- 日本の教会・戦争の記憶と平和

「高森草庵Ⅱたかもりそうあん」。ドミニコ修道会司祭・故押田成人ⅡしげとⅡ神父が、日本人の心に適う修道生活を求め、八ヶ岳山麓に開いた。標高千石。冬は零下15度を超え、雪と氷に閉ざされる。厳しい自然環境の中で自給自足、「祈り」と「労働」に専心する修道の地である。そこで一週間余りを過ごす機会を得た(2月22日・3月2日)。押田神父亡き後も、いまなお神父の霊性に魅せられ草庵の理念を受け継ぎ、集う人たち。そこには自然と一体の信仰に裏打ちされた人間らしい生活と真実の沈黙が日々を紡いでいた。その日々について、思い巡らした日記の二回目。

2月23日(月)

朝課(朝の祈り)は午前6時半から。川隅シスターと。45分間の沈黙、詩編唱和の後、当日のミサの朗読箇所をシスターが。旧約聖書はバルバロ訳、福音は押田神父訳で。風炉釜で薪を焚き、ささやかながら暖をとる。

厳寒のこの地に来たのは、酔狂のなせる業でもあつてのこと。郡山司教の勧めもあつてのこと。

「真つ直ぐ鹿兒島に帰つて来るのではなく、勉強になる所があれば、寄り道してくるといい」。

今年の正月、司教は若い頃に訪れた草庵を懐かしみつつ、「コローニーのよう。良い所だった」と教区本部で語った。

元来、好奇心旺盛な性質。この時は零下20度。あまりお勧めできませんが」と電話で諭すシスターを遮り、「大丈夫」と大見得を切つて来たのである。

午後から薪作り。秋までに伐採、敷地内敷か所に積載し放置した木々を、手鋸で適当な寸法に切断する。余程太い幹でない限り、チェーンソー等の動力工具は使わない。「押田神父さまに叱られる。常に『身に沁みだした仕事をしなさい』と仰られた」とシスター。1時間もしれば、上腕や背筋が痛む。たしかに、「身に沁

みた仕事」。晩課はドミニコ修道会司祭、渡辺裕成ⅡひろしげⅡ神父を加え、三人。渡辺神父は大学卒業後、

高森草庵滞在日記(2)

「祈り」と「労働」に専心する暮らし

教区神学生

諏訪勝郎

信徒宣教師としてネパールのパングラディシユ難民キャンプで2年半余り奉仕の経験をもつ。神学生時代から草庵に入り。現在、草庵の責任者を務める。仏国寺(福井県小浜市)で一年近い禅修行の経験もある神父。沈黙の間の結跏趺坐も堂に入ったもの。いかに草庵の霊性を受け継ぐに相応しい人物と見た。夕食後、DVDを観る。

2月24日(火) 午前6時半。30分の沈黙の後、渡辺神父司式によるミサ。古布の端切れ等で織ったストラを肩に、白布をまとい結跏趺坐した神父は達磨大師のよう。ミサは現在の典札に即し

ながら、朗読や奉献文の文言が一部、独自(押田記)である。ホスチアは、小麦粉を水で練って焼いた川隅シスターの手作り。聖体拝領では、ご聖体が漆塗の平皿で、御血が抹茶茶碗で、会衆をめぐる。終日、渡辺神父と薪作り。夕食後、「聖書教室」。近隣の信者が集う。この日の教材は聖書でなく、「九月会議―世界精神指導者緊急の集い―」(思草庵、1984年)。件の会議での出席者の声をまとめたもの。テキストは全世界仏教会

程においていかなる危害を加えても考慮しないという状況が生まれていることを指摘する。参加者は概ね、同じ問題意識を共有。しかし「破壊に身をまかせたのか、あるいは人間を全人類として結びつける原点にたつているものか」の件に至って、予定調和的団欒ⅡまどいⅡを嫌う天邪鬼が頭をもたげ、異論を唱えずにはいられなかった。「全人類として」か?ここに人間の傲慢がないか。むしろ「全生命(あるいは諸法)のひとつとして」ではないのか。ひよつとしたら「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の土を這う生き物をすべて支配せよ」(創1・28)と書いたときから既に人間は誤っていたのではないか。……おもむろに、「あなたを押し田神父さまに会わせたい」とシスターが言った。(続く)

文芸

俳句

短歌

鹿兒島純心 川上 和
カテドラル奉献されし司祭
団羊見守る使命に輝く
出水教会 遠竹陸郎
教皇らの写真飾りし書齋に
て今日も朝の祈り捧げぬ
労働と祈りに生きて数十年
吾れ八十近き齢となりぬ
マリヤの歌吟ずさみつつ厨
にて独り夕餉の料理作りぬ

国分教会 市来房枝
セコイアの繁るさ庭へ行き
通ひしレヒナ神父の俯消へ
ず(大口教会献堂五十年)
結婚の祝電給ひしレヒナ神
父四十五年経てお礼を言ひ
き
溝辺教会 松本文江
身は病むも心は病まず生き
ている神のみわざを信ずる
ゆえに
ひとすじの細き路ゆく一人
旅みちびき給う御手の彼方
へ
不死鳥の飛ぶ彼の国に父と
母なつかしく人等待着て在
さむ

奄美市 林 常広
父の日に鳥唄うたう先輩や
吉野教会 徳永ノブ子
七夕に平和の願い主に願ひ
検診を終えて安堵のみかん
むく
梅雨晴間あれこれ家事に精
を出す

谷山教会 東 健一郎
雨乞ひの思ひ出遠く暑に籠
る
鹿兒島純心 川上 和
暑き日のこの一水にいやし
受け

出水教会 遠竹陸郎
教皇のマリヤに祈る姿見ぬ
鳥の音聞きつつマリヤに祈
りたり
教会の庭美しき夏日かな
谷山教会 東 健一郎
雨乞ひの思ひ出遠く暑に籠
る

世に生きた現実を理解する
ためにマリヤ様の存在を忘
れてはなりません。マリヤ
様こそイエス様が真の神で
あり、真の人であることを
証しする方なのです。

歴史同様々な異端が生じ
ました。その異端の多くは
マリヤ様によるこの証を等
閑にし、理性によりイエス
様を理解しようとすること
に端を発するものです。こ
のように考えれば、正統信
仰の礎とはマリヤ様につい
ても正しい理解にあると言
つても過言ではないでしょ
う。こうしたことからマリ
ア様は教会の民を一つに結
び、神様へと導くための紐
帯であると言われるので
す。

2月24日(火) 午前6時半。30分の沈黙の後、渡辺神父司式によるミサ。古布の端切れ等で織ったストラを肩に、白布をまとい結跏趺坐した神父は達磨大師のよう。ミサは現在の典札に即し

鈴木神父のやさしい言葉

マリヤ様存在の意義

マリヤ様のことを理解するにあたって大切なことは、イエス様を宿したことのみを重視してはならない、ということ。結婚前の妊娠が発覚した場合、石打ちの刑に処せられていた時代のことを考えれば、マリヤ様の神様への従順とは命を賭けたものであり、それゆえ殉教者のさきがけとしても考えられるのです。

このことをルカ福音書にあるエリザベトの祝福の言葉に見出すことができます

マリヤ様のことを理解するにあたって大切なことは、イエス様を宿したことのみを重視してはならない、ということ。結婚前の妊娠が発覚した場合、石打ちの刑に処せられていた時代のことを考えれば、マリヤ様の神様への従順とは命を賭けたものであり、それゆえ殉教者のさきがけとしても考えられるのです。

このことをルカ福音書にあるエリザベトの祝福の言葉に見出すことができます

マリヤ様を抜きにしてイエス様を理解しようとするとは非常に観念的なキリスト理解に陥つてしまいます。つまり、福音が宣べ伝えられた生々しい現実が取り去られ、単なる言葉のみが信仰の対象となってしまう危険性が生じるのです。私たちに伝えられている福音とはマリヤ様から生まれたイエス様からのものです。神の独り子が人間として誕生したということ、そしてイエス様が人間としてこの

世に生きた現実を理解するためにマリヤ様の存在を忘れてはなりません。マリヤ様こそイエス様が真の神であり、真の人であることを証しする方なのです。歴史同様々な異端が生じました。その異端の多くはマリヤ様によるこの証を等閑にし、理性によりイエス様を理解しようとすることに端を発するものです。このように考えれば、正統信仰の礎とはマリヤ様についても正しい理解にあると言っても過言ではないでしょう。こうしたことからマリヤ様は教会の民を一つに結び、神様へと導くための紐帯であると言われるのです。

